

## 荒川洋治「こどもの定期」論

吉 田 敬

はじめに

「こどもの定期」(初出二〇〇〇年一月号「現代詩手帖」)は、第十三回(平成十七年度)萩原朔太郎賞を受賞した詩集『心理』(二〇〇五年五月みすず書房)の二番目に置かれた作品である。

荒川洋治は一九七六年一月韓国国際文化協会の招待で会田綱雄、諏訪優、吉原幸子、清水哲男、崔華國らと韓国を訪問しており、釜山で許萬夏に出会い、爾来交流を続けている。また、荒川は、韓国に十一回も旅行しているという韓国好きでもある。「こどもの定期」は、韓国近代文学の祖として知られる李光洙イ・グンソクの学生時代の物語を組み込んだ作品である。

「こどもの定期」は、一行ずつ空白を置いた一〇連パシで構成されている。第一連、第三連、第一〇連は、森鷗外の「寒山拾得」(大正五年一月「新小説」)、「寒山拾得縁起」(大正五年一月「新小説」)につ

いて語られる。第二連、第四連、第六連、第八連は、朝鮮生まれの作家李光洙が、明治学院中等部に留学していた少年期を、新潟女子短期大学教授波田野節子が行った講演内容を引きながら述べている。第五連、第七連、第九連は、都内のOL石間宏子が「新・新小説」を定期購読するという設定で物語が構成されている。

この論ではことばの意味のかかわりから作品解釈を行い、韓国の作家李光洙の学生時代が描かれている意図を考察したいと考える。

### 一、寒山拾得

寒山と拾得は唐代の僧で生没年は不詳であるが、「寒山詩」を残したとされる。寒山、拾得は、中国浙江の天台山国清寺に住み、寅に乗って衆僧を驚かせたという禪僧豊干に師事した。拾得は豊干に拾われたことによる名であり、寒山は、拾得に残飯を与えられて生じた。また、寒山は文殊、拾得は普賢の化身といわれ、文殊、普

賢はともに釈迦の脇士である。寅に乗る豊干、智慧としての経巻を持つ寒山、実践の箒を持つ拾得の飄逸な姿は、禅画の画題にもされた。

森鷗外はこの不思議な逸話をもとにして、「寒山拾得」と「寒山拾得縁起」を書いた。森鷗外の「寒山拾得」を要約すると次のようなものである。

天台に赴任しようとする閭丘胤のもとに乞食坊主の豊干が現れ、持病の頭痛に悩む閭の頭に水を吹き付けて癒した。閭は大いに敬服し、これから台州に往くのだが、逢いに往つてためになるようなえらい人はいないかと聞いた。豊干は、天台国清寺には寒山、拾得という人物がいるといつて去る。閭が赴任して早々に国清寺に赴いて面会を求めると拾得は皿洗いで、寒山は拾得から与えられる残飯で生きる貧相な小男たちでしかなく、決して高僧ではなかった。しかも、うやうやしく挨拶をした閭に、ぼろぼろの衣を着た寒山、拾得は、腹の底から笑い出し、「豊干がしゃべつたな」といつて逃げたという話である。

この物語は、なぜ豊干が寒山、拾得を、逢いにいつてためになるようなえらい人として紹介したか、寒山、拾得がなぜ閭の前から逃げ出したのか、彼らは一体何者なのか等、疑問も多く不可解なものであるが、高潔な説論も世俗のことばでは十分に伝えきれない（不立文字<sup>1</sup>）とするある種禪問答的作品である。

森鷗外の「寒山拾得縁起」は、「徒然草に最初の仏はどうしてできたかと問はれて困つたと云ふ話があった。子供に物を問はれて困ることは度々である。」と書き出される。そして、子供に、難しすぎて読めるはずもない「寒山詩」を買つてくれと求められたり、寒山や拾得という人はどんな人なのか、文殊が寒山で、普賢が拾得だというのが解らないと問いただされる。語り手はことをわけて話そうとするがなかなか理解してもらえず、困つてしまふのである。さて、「こどもの定期」は次のように始まる。

#### 森鷗外の「寒山拾得」

（ふつうは、かんざんじつとくと読むが、こどもはかんざんしゅうとく、と読む。どちらも正しいではないか）

は思わずにつこりするようないい小説だ

それでも鷗外のこどもは

鷗外に質問する

「その寒山と云人だの、それと一しよにゐる拾得と云ふ人だのは、どんな人でございます」（「寒山拾得縁起」）

ほんと、どんな人だろう

（こどもの定期）冒頭

拾得が人名であるから当然とされているが、拾うこと（拾われる

こと)の意味を差しはさむ、意表をつく文言である。しかも、こどもの素朴なことばとされている。また、「ほんと、どんな人だろう」と語り手も興味を示している。

正確なことを知っていくと みんなどうなるのだろう

鵲外は

そんな点に注意しながら

自分の部屋で

「寒山拾得」を仕上げていた

(三連二行目―五行目)

「こどもの定期」の語り手は、「正確なことを知っていくとみんなどうなるのだろう」と不安を含ませていい、「鵲外は／そんな点に注意しながら／自分の部屋で／「寒山拾得」を仕上げていた」と述べる。「寒山拾得」は、「心の中では、そんなことをしている寒山、拾得が文殊、普賢なら、虎に騎った豊干はなんだらうなどと、田舎者が芝居を見て、どの役がどの俳優かと思ひ惑ふ時のやうな気分になってゐるのである。」と、閻の卑俗な内心をイロニー的に語っている。「そんな点に注意しながら」とは、瘦せて見すばらしい小男の寒山、拾得が何者か、なぜ閻の前から逃げ出したのか等を、慎重に言語外のことばとして読者にあずけるように文脈を仕上げていたの

である。

文豪の一人、森鵲外は 座敷から

逃げようとすることもたちに

あわてて云った

「寒山は、経巻をもつ。

ホウキをもつのが拾得だ！(と思う、たしか)

二つを

とりちがえないように」と。

(一〇連一行目―七行目)

森鵲外の「寒山拾得」をモチーフにして生成された「こどもの定期」のこどもは、一人ではなく二人になっている。「寒山拾得」の作品を仕上げようとする矢先、森鵲外は、(すでにこどもたちが逃げようとしているのを予期して)、逃げようとするこどもに向かつて、「寒山は、経巻をもつ。／ホウキをもつのが拾得だ！(と思つ、たしか)／二つを／とりちがえないように」と。と叫んでいる。こどもたちにそのことを教えようとしているようにとれるが、二人が演じようとしている役柄を確認しているようにもとれる。

鵲外の「寒山拾得」の寒山と拾得は、閻の前から笑いながら逃げた。「寒山拾得縁起」のこどもは、寒山、拾得が文殊、普賢の化身

であるということが理解できなかった。説明に窮したあげく語り手は、「実はババアも文殊なのだが、まだ誰も拝みに来ないのだよ」といつている。「こどもの定期」のこどもたちは決して寒山、拾得の化身ではない。しかし、鷗外の前から逃げるのは同じであり、その行為を通して二人のこどもたちは、寒山、拾得に重ねられているのである。

## 二、李光洙という作家

三枝寿勝「近代史を生きた李光洙」〔『韓国文学を味わう』へ第IV章〕一九九七年二月 国際交流基金アジアセンター〕による李光洙についての履歴を要約すると次のようなものである。李光洙は一八九二年に朝鮮半島北部定州の貧しい農家に生まれた。一一歳のとき両親が疫病（コレラ）で急死し、二人の妹とともに孤児となり親戚の家を転々としながらタバコ売りをするなど半放浪生活を送った。東学教徒に拾われ書記になった。ソウルで日本語教師になるが、天道教の派遣で日本に留学することになる。その年天道教の分裂で一時期帰国するが、翌年国費留学で再び来日し、一九〇七年、明治学院普通部三年年に編入して今度はキリスト教と出会う。一九〇九年小説を書き始め、短編「愛か」を『白金学報』に発表する。一九一〇年明治学院を卒業して帰国し、五山学校に教員として赴任し、最初の妻と結婚する。その後心身共に疲労困憊し、アメリカへ渡るつも

りでシベリアに行くけれども第一次大戦で帰国する。一九一五年再度来日して九月、早稲田大学高等予科に編入する。一九一七年一月から長編「無情」を朝鮮総督府機関誌『毎日申報』に連載、続いて「開拓者」を連載するなど朝鮮近代文学の草分けとなる。一九一九年二・八独立宣言を起草するなどの活動をし、上海に亡命して臨時政府に加わる。しかし、一九二二年帰国して親日文学者に転向する。そのため民族反逆者扱いを受ける。一九五〇年の朝鮮戦争のなかで北朝鮮に連行されて行方不明となる。一九九一年判明したところによると、一九五〇年一月北に連行される途中凍傷が悪化して死亡したとされる。

韓国においては、李光洙（号は春園）は韓国近代小説の父といわれ、ほとんどの人が知っているけれども、日本では『朝鮮近代文学選集1』（二〇〇五年一月 平凡社）に「無情」が掲載されている程度で知る人は少ない。

「寒山拾得」が書かれる一〇年ほど前の、明治四〇年 朝鮮から来た国費留学生・李光洙（イ・グァンス）が先輩の下宿に遊びに来ていた

波田野節子の講演「李光洙と明治学院」〔『言語文化』一五号〕によると

一五歳の彼ら二人は

どうも「抱き合って寝ていた」のかもしれないという狭い部屋だから？

うん（と李光洙は、日本人であるべくに答える）

（二連二行目〜九行目）

「李光洙と明治学院」（『言語文化』一五号）は、一九九三年〇月に開催された明治学院大学公開講座「明治学院ゆかりの文学者たち」の第二回の講演記録である。明治学院は、島崎藤村、岩野泡鳴など多くの学者、作家を生み、また、中国、韓国からの留学生を受け入れ、優秀な人材を輩出してきた。公開講座の第一回は「岩野泡鳴」で、第二回目が日本ではあまり知られていないが、韓国近代小説の父といわれる「李光洙」であった。講演のあとのフリー討議の終りあたりで波田野は次のように発言している。

御稚児さんで思い出しましたが、後に『林巨正』という長い作品を書いた洪命憲ホンミンゴンという人がいます。彼は明治学院には来ませんでした。同時期東京に留学中で、李光洙の文学の先輩格でした。彼の下宿に泊まる時は、抱き合って寝ていたようです。上海にいたときにも彼は洪命憲と会っているのですが、「もう私たちはこどもじゃないから昔みたいに抱き合って寝るわけにもいかない」というようなことを書いているので、この人たち中

学校のときはそういう寝方をしていたのか、と逆に考えました。（『言語文化』一五号）

洪命憲（一八八八年〜一九六八年）は、一八八八年忠清北道槐山、名門豊山洪氏の家に生まれた。幼時から漢学を学び、成長につれて中国大河小説、自然主義文学、とくに、ロシア文学に影響を受けた。ソウル中橋義塾を経て日本に留学中、夏休みに故郷に帰っていたが、その時、父の自決を目撃して生涯忘れることのない衝撃を受けた。父洪範植は錦山郡守であったが、一九一〇年日本帝国支配下の亡国の悲報（日韓併合）を知り、自決して国と命運をともしたのである。洪命憲は伝統に従って三年の喪に服し、それが明けると上海、東南アジアなどを放浪し、帰国後三・一独立運動に際して槐山でのデモの先頭に立ち、逮捕されて一年半西大門刑務所で服役した。その後独立を目指す民族統一戦線組織である「新幹会」結成（一九二七年）に大きな役割を果たした。解放後、南北分断の危機に際して四八年、金日成主席の呼びかけで南北諸政党社会団体連席会議に参加し、そのまま北に残り内閣副首相などの役職に就いた。彼の著書は、一九二八年一月から一九三九年三月まで「朝鮮日報」に連載した『林巨正』などがある。「こどもの定期」の李光洙の先輩というのは、日本に留学（一九〇六年来日、一九〇七年〜一九一〇年（私立）大成中学校在籍）していた当時の洪命憲である。

波田野は「洪命憲の東京留学時代」で、李光洙と洪命憲の出会いと彼らの下宿先について次のように記している。

旅館は費用がかさむので、まもなく「本郷のとある旅館兼下宿」に移り、そこに半年あまり住んでから、その後は日本でできた友人たちと一緒に一軒家を借りて住んだ。当時、仲間と共同で一軒家を借りて飯炊き女を置くのは、留学生だけでなく日本人の上京学生にも見られた生活形態である。下宿に移り住んだ頃そろそろホームシックにかかり始めていた洪命憲は、女中から同国人が同宿にいると聞いて喜んだ。それが文一平と李光洙であった。李光洙の方でも、「本郷区元町の玉眞館」に住んでいたときに銭湯で洪命憲に初めて出会ったという逸話を、ある座談会で語っている。明治三九年の本郷区元町は現在の文京区本郷一、二丁目あたりで、いまは元町公園がその名前をとどめている。水道橋をわたると左手が神田区三崎町（現在の千代田区三崎町）で、角に洪命憲が中学入学準備のために通った東洋商学校があり、もう少し先に大成中学があった。

〔洪命憲の東京留学時代〕二〇〇二年二月「新潟大学言語文化研究」第六号

これは洪命憲の側で書かれた文章で、一九〇六年入学時の様子である。洪命憲は李光洙にさまざまな本を貸し与えて文学に目を開かせ

た先輩である。文一平はのちに著名な歴史学者になった人物である。

波田野のコメントで、「この人たちが中学校のときはそういう寝方をしていたのか、と逆に考えました。」は、奇妙な言い回しだが、この発言の前に「李光洙」のホモ・セクシュアルを疑う発言があったり、稲垣足穂の名や萩尾望都の『トーマの心臓』を引き合いに出して、ヨーロッパの中等教育機関の宿舍のことに過ぎらず、どこでも起こった少年愛的なものではないかなどの意見も出ていた。

「こどもの定期」は、「狭い部屋だから？／うん（と李光洙は、日本人であるべくに答える）」と、（ホモ・セクシュアル性を認識しながら）あえてそのことを避けるような問答で、ずらしながらさらりと語っている。さらに、四連でも、李光洙のセクシュアリティにかかわる語りは続けられる。

抱き合う人があるということは不幸なことだ

女を抱かないと話もできない、そんな男にどうして生まれたのか

李光洙は日本に来ると早々と女の場所に行き

自分の一五歳を次々に捨てていった

「お庭でもみましようよ」と婦人がいうと

廊下の陰にかくれて多くの男たちが眠ってしまうように

（四連一行目～六行目）

波田野は、質疑応答で「李光洙の名誉のために付け加えますと、自叙伝には、「吉原には行つたけれども、お化けのような顔を見て驚いて帰ってきた」と、書いてあります」と語っているが、講演では次のように述べている。

このように彼は明治学院に入学してキリスト教に会い、トルストイを知り、キリスト教的な理想をもって清らかな生活を送りたいと、最初は考えたようです。しかし、そのあといろいろな本を読んで彼もだんだんと考えが変わっていきます。前半にはトルストイ、木下尚江、特に木下尚江の『火の柱』には感銘を受けたということを書いていますが、後半になりますと、自然主義の文学をたくさん読み、バイロンに心酔したりして酒を飲み、そして「吉原にも出掛けた。自分は汚れた」とも書いています。この頃の彼は快樂至上主義、本能満足主義という言葉に心酔していたようです。

皆さんのお手元にお配りしたのは、『富の日本』という雑誌に光洙が李寶鏡という名前で投稿した作文です。「明治学院普通部第五年韓国留学生李寶鏡」とあり、左側にはこの時代の李光洙の写真が載っています。この作文を読みますと、「快樂は吾人生存中の最大全体の目的である」とか、「快樂こそが人間の存在の目的だ」とか、「本能を満足させるのがよい」という

ような、いかにも高山樗牛あたりを思わせるような言辞を弄しております。

（『言語文化』一五号）

李光洙は、天道教の派遣で日本に留学するが、明治学院に入学してキリスト教に出会う。波田野の講演は、李光洙の読書遍歴と思想的な変化、それにともなう行動と彼のセクシュアリティを語るものである。キリスト教の純粹主義から、歴史・社会的課題を主題とするトルストイへ向かったという。木下尚江「火の柱」は、日露戦争開戦までの明治後期を舞台に清廉な主人公篠田長二が、警察のスパイの陰謀によって逮捕される物語である。篠田長二は、キリスト教社会主義者であった。また、李光洙の読んだバイロンは、「チャイルド・ハロルドの巡礼」などの作品があり、愛と苦悩の詩人としても知られている。波田野は、明治学院時代の記述のなかからセクシュアリティにかかわる文言を抽出して、文学の影響と当時の彼の心理状況を対応させて語っている。

「言語文化」一五号では、後半の討議のなかで、李光洙のセクシュアリティにかかわつてさらに追求される。天沢退二郎は、次のように質問する。

『愛か』については、最初に折口信夫と比較できるとい

とを言いましたが、これはいわゆる少年愛の小説と言えるものですが。「口笛」など初期のいくつかの短編でも少年愛のテーマが中心になっておりますが、折口信夫の場合にはホモ・セクシュアリティが生涯を通じてあるわけですが、李光洙の場合にもそういうことはあるのでしょうか。

〔言語文化〕一五号

との問いに、波田野は「この『愛か』を一番最初に発掘されたのは大村先生ですが、……」といい淀み、四方田犬彦が「これから研究しなければいけないことですね」と口をはさむ。そして、波田野は次のように続ける。

必ずしも彼にはそういう性向があったという気はしないのですが……作品にあらわれてるかどうかも難しいところですよ。し、本当にそういう性向があったとしても、社会的な制約が強ければなおさら作品には出さないといいことになると思います。だから、かわりに近代的な恋愛小説をたくさん書いた、と逆に考えるとこわいですが(笑)。作品では『愛か』だけだと思います。ただ、そう言われてみますと、例えば丹齋(申采造)という思想家は最後まで思想を曲げず、獄中死した人ですが、その人のことを李光洙は「私は彼を本当に愛していた、恋人のよ

うに心から愛していた」とある回想記に書いています。こういうふうによく書くのかな、と回想文を読みながら驚いたことがあります。

〔言語文化〕一五号

波田野は、李光洙のホモ・セクシュアルの可能性を示唆するだけで断定はしていない。あくまでも作品資料のなかで語ろうとする。作品に表れているとしたら『愛か』であり、丹齋(申采造)についての記述もあるが、表現上のこともかもしれないとこの件については断定を避けている。「こどもの定期」は、「正確なことを知っていくとみんなどうなるのだろう」(三連一行目)と、戸惑いを見せる。「言語文化」一五号の参加者たちは不明なことについて学問的興味を示すが、「こどもの定期」の語りは、かりにそうであったとしても「狭い部屋だから?」と避けている。「正確なことを知っていくとみんなどうなるのだろう」という文言は、むしろ、第一連九行目(寒山、拾得とは)「ほんと、どんな人だろう」とつながり、寒山、拾得が単なる貧しく貧相な小男たち以外の何者でもなかったとか、また、文殊、普賢の化身であるとか判明してしまうことを懸念することに移行している。李光洙は、謎めいた生いたちをもち、日本の中学校、大学に通い、『無情』で文学界に躍り出て朝鮮独立運動に挺身し、のちに親日派として世間から民族の「傷口」という汚名を

被せられ、忽然と消えた人物である。キムヒョンという研究者は、このことを「李光洙は触れれば触れるほどに血の噴き出す民族の傷口である」と述べている。

「あ、それから―」と李の友人は

白金の坂をおいけて来ていう

日本はいまわしいが

ぼくはぼくのいるいまの日本を少しずつだいに

思っているところだよ

ぼくはぼくという、こどもを

この国に捧げたのだから

でもあの濃いみそ汁だけはなんとも と笑い

笑顔の半分をたやすく夕日にあてた

(八連二行目―九行目)

八連の文言はフィクションとしての場面である。韓国の人々の心情をよく知る荒川であるが、李の友人にこのように語らせている。洪命憲の父洪範植は日韓併合に対して自決し、洪命憲は三年の喪に服し、後に北朝鮮に向かったのである。当時の日本人の韓国、朝鮮の支配意識の残酷さに対する心情を「日本はいまわしい」という文で表現している。一方「ぼくはぼくという、こどもを／この国に

捧げたのだから／でもあの濃いみそ汁だけはなんとも と笑い／笑顔の半分をたやすく夕日にあてた」と抒情的場面を沿わせて語らせている。洪命憲は日本の学校で少年時代を過ごしたが、彼の人生を重ねると大きな齟齬が生じる。洪命憲の当時の日本にたいする怨恨は、そのように日本人が考えるようなものではなかったはずである。李光洙も後期、親日派に転向したといわれるが、世間から民族の「傷口」という汚名を被せられた心情は複雑なものがあつたはずである。

だが、李光洙の友人が洪命憲であるという保証はない。また、「こどもの定期」は個人の履歴や歴史を語る散文ではなく、李光洙も友人もあくまでフィクションの中の人物である。そして、日韓の軋轢が解消することを願う方向の作品でもある。「笑顔の半分をたやすく夕日にあてた」からは、民族の痛い心情を読み取ることができる。

「こどもの定期」の「寒山拾得」の物語が森鷗外の「寒山拾得」と「寒山拾得縁起」、李光洙の物語が波田野節子の講演「李光洙」(『言語文化』一五号)をもとにしているのにたいして、都内に住むOLの岩間宏子の物語は、文献にもとづかず現代の社会状況を基礎にした作家独自のフィクションである。

都内OL、岩間宏子は思い立って

平成一二年の五月から、「新・新小説」の定期購読をはじめた

ある月の「新・新小説」におもしろい記事がのつたためだ

この雑誌を続けてよみたいが

いつもいつも書店に来るわけにはいかない

彼はわたしが書店に入るとわたしのスカートをひっぱるして

なかなか「人間についての本来の行動をとれない」

それで「女性が」確実に入手するには

定期購読しかないと思ったのだ

昼休みに郵便局へ購読料を振込みにでかけるのは手間だが

(彼はわたしが郵便局へ行こうとするとパンツをひっぱるのだ)

定期購読をしてみると、次々にいいことが起こった

あのように 毎月確実に訪れるので安心だし

封筒を切るおりの感しも 平らな坂を降りているようでこころよい

「あなたの期限は来たる四月に切れます。引き続きのご購読を

お願いいたします」とあり

自分が忘れられてはいない、と感じるひとときは濃厚なみそ汁

のようなものだった

(五連一行目〜一八行目)

「都内のOL、岩間宏子は思い立って平成二二年の五月から「新・

新小説」の定期購読をはじめた」(四連一行目〜二行目)とある。

森鷗外の「寒山拾得」が掲載された雑誌は「新小説」である。「新・

新小説」という雑誌はなく、森鷗外の作品が掲載された「新小説」を現代に位置づけるため「新・新小説」としている。

岩間宏子はその雑誌を読みはじめた動機は興味をひく記事があったためで、彼女はこの雑誌を続けて読みたいと思った。だが、岩間宏子は「新・新小説」を入手するには「彼はわたしが書店に入るとわたしのスカートをひっぱるして」(五連六行目)、「彼はわたしが郵便局へ行こうとするとパンツをひっぱるのだ」(五連一行目)という彼の誘惑から遠ざからなければならぬ。彼女は確実に入手するには定期購読する以外にないと思ったのである。ここで「彼」という人物は岩間宏子にかかわろうとする人物であり、卑猥で滑稽な場面として描かれている。「彼」ということは、比喩のようであるが、明確な指示対象は示されていない。現代は欲望がひしめいており、消費の時代である。彼女を人間についての本来の行動、文化的楽しみに向かわせない刺激、誘惑は至る所に存在する。スカート、パンツという洋服類、(パンツを下着と取るなら下着類)に目を向けさせる刺激的販売競争がある。購買欲をそそる誘惑である。彼女は定期購読をすることによってそのような誘惑に煩わされることなく確実に「新・新小説」を入手することができるようになった。

大衆の一人、岩間宏子は「新・新小説」新年号を手にし

印刷もまあらしい「寒山拾得」を読む

山寺の二人、あらわれ方、かわいいなあ、ふふと  
わらい、定期購読はこの点でもよかったわと思つ

(山なかの長い坂道を歩くように)

(七連二行目、五行目)

定期購読は、彼女を満足させ、楽しみを与えた。彼女を単に無名の大衆の一人としてではなく、「引き続きのご購読をお願いいたします」と彼女の存在を大切に扱ってくれる。森鷗外の「寒山拾得」の内容は、正確に理解できないが、「山寺の二人、あらわれ方、かわいいなあ、ふふと」一人坂を降りるように若い現代女性風に読み進んでいくと、しあわせを感じるのである。だが、彼女は自身の自由の猶予期間、若さで売り込める魅力の期限を四月までと考えている。それまでの間、「誰かが追いかけてきてなにかを述べることもある」と期待するが、四月までという期限を考えるとぐつたりと疲労を催すのである。現代は消費的経済社会であり、女性の若さに魅力の価値を置く一方、独身女性を一人前と認めようとする社会でもある。岩間宏子は現代社会に生きる孤独な女性の姿であり、そのあり方をイロニーを添えて表現している。

七連冒頭の「大衆の一人、岩間宏子は」という文言と、一〇連冒頭の「文豪の一人、森鷗外は」は対応しており、七連五行目の「坂

道」は、李光洙が友人と別れる場面六連四行目の「白金台の坂」と対応しており、森鷗外の「寒山拾得」の物語、李光洙の物語に重ねられている。岩間宏子の物語は「寒山拾得」の物語、李光洙の物語を、現代に引き寄せる役割を果たしている。

### 三、こどもの定期

「こどもの定期」は、森鷗外の「寒山拾得」、「寒山拾得縁起」にまつわる物語と、李光洙が日本に留学していた少年時代の物語、そして、「新・新小説」の読者という現代の都内のOL岩間宏子の物語から成り立っている。

森鷗外の「寒山拾得」、「寒山拾得縁起」にまつわる物語と、李光洙が日本に留学していた少年時代の物語の意味を結ぶものの一つは、寒山拾得の正体の不明確さであり、李光洙とその先輩である洪命憲との間にホモ・セクシュアリティがあつたか、なかつたかの不明確さである。また、「ふつうは、かんざんじつとくと読むが、こどもはかんざんしゅうとくと、と読／む。どちらも正しいではないか」(一連二行目、三行目)ということばと李光洙の物語中の「日本では拾得は「しゅうとくとく」ではなく「じつとくとく」であると思ひながら」(五連七行目)という語句も重ねられている。拾得の名は豊千に拾われたことに由来するというが、李光洙は東学教徒に拾われてのち日本に留学している。そして、それぞれの物語の終結部では、

人物がともにぐらつきながら品川方面に向かうのである。

寒山拾得が、文殊普賢の化身であるように、李光洙、洪命憲が寒山拾得であるとは決していえない。しかし森鷗外の「寒山拾得」、「寒山拾得縁起」にまつわる物語は、李光洙と洪命憲の少年時代の物語に重ねられている。

三つの物語を整理すると次のようなものになる。寒山、拾得は、「寒山詩」を残してはいるが、その実態は知られていない。文殊、普賢の化身というが、寒山、拾得は世俗のなかで生きる姿を通して釈迦の教えを説こうとするものである。寒山、拾得はあまりに世俗的な姿であるため、時に森鷗外の「寒山拾得縁起」の語り手のことばの、「実はパパアも文殊なのだが、まだ誰も拝みに来ないのだよ」のように、軽くことばに乗せられたりもする。「こどもの定期」は、李光洙の物語を主軸にしており、「寒山拾得」の物語は、俗習にとられず、屈託なくおおらかな生きる姿を李光洙、洪命憲に投影している。

「こどもの定期」の鵲外から逃げ出したこどもは、定期券を見て、自分が拾得であることを、「じつとく?」と「しゅうとく」と読んだことと重ねて不思議がる。品川方向に少しぐらつきながら歩くところで終わる。また、「こどもの定期」は、期限という観念で結ばれている。李光洙が日本の学校でおおらかに生きるのもこども時代である。都内〇Lの岩間宏子が「新・新小説」などを楽しんだり

する独身生活はまだ魅力のある四月までで、そのうち結婚するかもしれない。

李光洙はこどもの時東学教徒に拾われて日本に留学した。洪命憲という秀才とめぐりあって文学に目覚めた。かれらは当時の日本の厳しい偏見のなかでもおおらかに学園での青春を送った。学業を身につけることが出来たし文学も学んだ。同国人に限らず、日本人、中国人の親友たちとも深く交わった。寒山拾得のように飄々と智と実践に生きたのである。先輩の洪命憲が白金の坂を追いかけてきて「日本はいまわしいが／ほくはほくのいるいまの日本を／少しずつだいに思っているところだよ／ほくはほくという、こどもを／この国に捧げたのだから／でもあの濃いみそ汁だけはなんとも」と笑い／笑顔の半分をたやすく夕日にあてた」(八連三行目〜九行目)と語っている。洪命憲は、日本の優位意識の強い当時の日本であっても、かけがえない青春の数年間を過ごしたことによって、少しでも好感を持つように考えようとしている。しかし、李光洙や洪命憲の「こどもの定期」の期限は一九一〇年までであった。李光洙、洪命憲は歴史の流れのなかで数奇な運命をたどることになる。

「こどもの定期」は、大人になる直前の人物の挿話(エピソード)で成り立っている。こどもの期間へ青年期へは、驚異的成長をとげる貴重な期間である。都内の〇L岩間宏子は誘惑を排して「新・新小説」を定期購読することによって人間についての本来の行動を経験した。朝鮮

からの留学生李光洙やその友人は学園生活で熱心に学習して優秀な成績をおさめたし、多くの友人と交わることができた。寒山拾得は深遠な理念を現実的な生活に飄逸な形で具現する物語である。かれらとはともにあるがままの姿で素朴にこども時代を過ごす。あるがままに生きることができるのはこどもの特権であり、人間にとってかけがえないものである。

## おわりに

「こどもの定期」の登場人物たちの物語は、坂道を降りる際に躊躇いを示すように少しぐらつくところで終わっている。現代の大衆的な読者の岩間宏子の物語も坂道を降りるところで終わっている。李光洙、寒山、拾得、あるいは森鷗外といった固有名詞がもつ物語は歴史のなかに茫漠と広がっている。鷗外の寒山拾得は文殊と普賢の影を引いていた。「こどもの定期」の鷗外のこどもたちは寒山拾得をなぞるように生成されていたし、李光洙と、その先輩の洪命憲にあわく重ねられていた。「正確なことを知っていくとみんなどうなるのだろう」という文言を開いていくと、際限ない広がりが見えてくる。その後かれらはへこどもでなく李光洙や洪命憲として生きていくことになる。

彼らの物語は、それぞれの履歴をなぞるにとどまらない。彼らの作品や行動の評価は生成されていく。李光洙は、日本ではあまり知

られていないが、韓国近代文学の祖として広く読まれていくだろう。韓国では名は知られているが、後期の親日的傾向のため複雑な国民感情を呼び起こす存在である。キムヒョンという研究者は、「李光洙は触れば触れるほどに血の噴き出す民族の傷口である」と述べている。だが、その評価も歴史のなかで変わっていくかも知れない。固有名詞が持つ深遠さである。

「こどもの定期」は九〇年も前の李光洙の学生時代の物語であるが、岩間宏子という無名の森鷗外読者によって現代に引き寄せられた。日本は現在なお硬直した北朝鮮との関係があり、韓国にも充分に理解されているとは言い難い。最も近い国でありながら朝鮮半島をめぐる日本の抱える課題は重い。

## 註

(1) 禅の思想は、不立文字、教外別伝、直指人心、見性成佛の概念で示され、他から教えられるものではなく、善悪、美醜、幸不幸、真偽、有無など、一元的価値判断にとられず、教典以外に真理が存在し、悉有仏性の真実があり、自己の内に目覚めるものであるとする。

(2) 坂、坂道についてであるが、洪命憲が東京に住んだのは本郷区元町（現在の文京区本郷一丁目）の玉眞館であった。水道橋をわたると左手が神田区三崎町（現在の千代田区三崎町）で、角に東洋商学校があり、もう少し先に大成中学があった。李光洙も中学入学準備のため、東洋商学校に通ったことがある。

しかし、「こどもの定期」の場面設定は、明治学院中等部留学生・李

光洙は友人の下宿を出て、白金台の坂を降りる平らなところで少しづらつくようにして品川の方角に向かった（六連三行目）としている。白金台には日吉坂や日東坂があるが、明治学院前を通る桑原坂（白金台二丁目から三丁目の間）あたりと推察される。桑原坂をさらに南に向かうと品川である。

―よしだ・たかし、広島大学大学院博士課程後期在学―